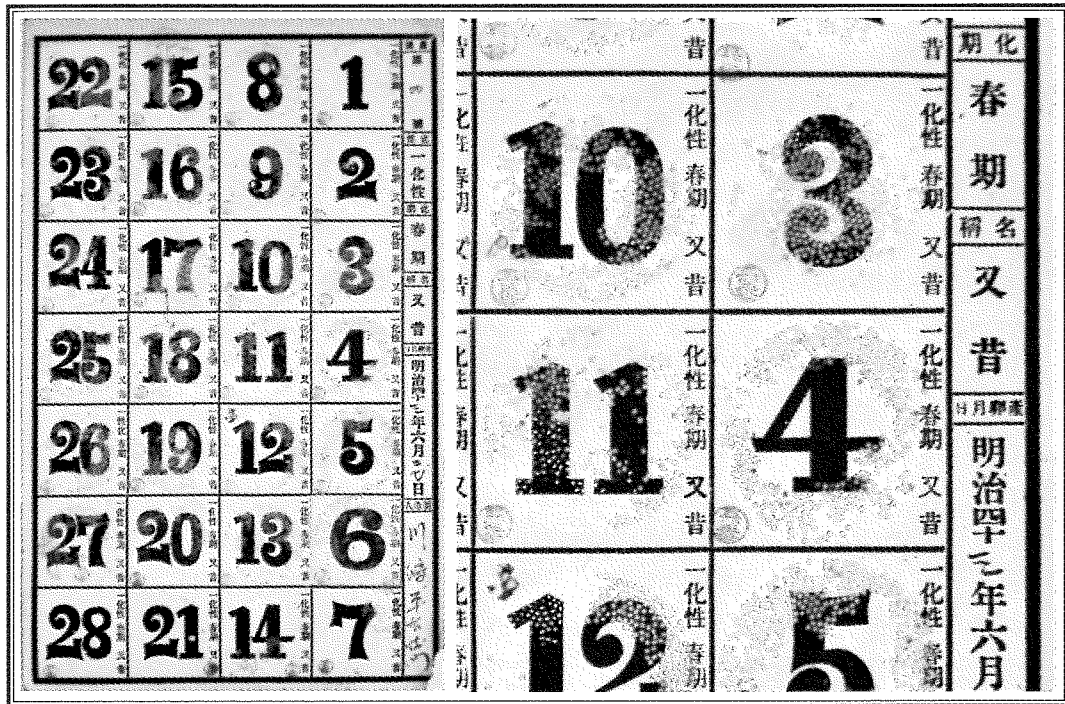


あるむぜお112

府中市郷土の森博物館だより

a / museo NO. 112

2015年6月20日



明治時代に使われた春蚕の種紙。番号のあるところに卵が産みつけられています。

目次

- 1-2 カイコがつくった風景
①種をまき育てる
- 3 最近の発掘調査
沖積低地で古墳時代前期の遺跡を発見
- 4-5 ノート 太陽系形成の謎を解く隕石
- 6 展示会案内
企画展 隕石展 宇宙からの贈り物
- 7 展示会案内
特別展 あしもとネイチャーワールド 夏の生きもの甲子園
- 8 多摩川あさかな考
⑤みんなまとめてハヤ
- 9 平成 26 年度資料受入れ、利用状況報告、
新刊案内
- 10 連載 『県居井蛙録』にみる江戸時代の庶民の生活
①跡取り息子の結婚

カイコがつくった風景

養蚕は府中の昔を知るうえで欠かせないものです。しかし現在、府中で養蚕は行われておらず、人びとの記憶からも消えつつあります。博物館では、府中の養蚕を再発見する特別展を、平成28年2月～3月に計画しています。本コーナーでは、府中と養蚕の関わりを、カイコの生育とともに紹介します。

①種をまき育てる

上の写真は、養蚕をはじめるために業者より購入するカイコの種（卵）紙。28の区画に別けられており、製造時にはそれぞれを仕切り、そこに1匹ずつのカイコガを配置し、産卵させます。紙には品種、製造年月日が記載され、東京府による検査を受け合格したことを証する印が区画ごとに捺されています。

カイコが作った風景

①種をまき育てる

桑の葉をエサにしてカイコ（カイコガという蛾の幼虫）を育て、繭（サナギ）にする養蚕は、日本各地で古くから行われていました。多摩地域では江戸時代から「桑都」と呼ばれていた八王子が有名です。府中市域でも、同じ頃から養蚕を行っている家がありました。

開国以降、海外への輸出品として、繭からとれる生糸、生糸を織った絹織物の需要が高まりました。明治時代になると、技術が改良され、養蚕はさらに多くの地域で行われるようになります。農家では養蚕で多額の収入が見込めたため、副業として行う家が増えていきました。府中も、その例外ではありませんでした。

府中を代表する祭礼、くらやみ祭が行われる5月は、農作業が忙しい時期でもあります。府中付近の稲作は、新暦6月末から7月初旬頃に田植えをしていましたから、4月・5月は、苗代をつくり、種もみをまく時期です。6月は麦刈りの準備も必要です。それとともに、5月には重要な作業がありました。それが養蚕の準備です。この仕事は、重要な農家の年中行事の一つだったのです。

カイコは虫でありながら、野菜や穀物のように育てるという印象が強くあります。そのためか、カイコの卵のことを一般的に「種」と呼んでいます。種を産み付けた紙を「種紙」と呼び、業者によって販売されていました。現在でも米の種もみや野菜の種は種屋から購入する農家が多いです。カイコも同様で、伝染病などのリスクが少なく、産卵した卵を保存し、適切な時期に孵化させることができる種紙は重宝されました。

明治時代の府中では、5月から6月頃にかけて育てる「春蚕」だけを扱っていた家が多かったといえます。春蚕を育てる最初の行程が5月初旬に行われる「掃きたて」と呼ばれる作業です。種紙にエサとなる細切りの桑の葉をのせ、種紙のある部屋を暖かく保つと、2週間ほどで孵化します。種紙の上に孵化した小さなカイコを箒で掃き、竹でできた「エビラ」と呼ばれるカイコの居場所に落とすのが「掃きたて」です。ここから約1か月にわたるカイコの飼育作業がはじまります。温湿度

を管理し、消毒して病気を防ぎ、ネズミなどに食べられないようにつとめます。そして適宜エサとなる桑の葉を与え、清潔にするため掃除を行うなど、気をめけない日々が続きます。

このとき与えるカイコのエサを得るために、府中には昭和30年代頃まで桑畑が広がっていました。「今では住宅地になってしまったけれど、むかしは京王線の府中駅の北とか、いたるところに桑畑が広がっていたんだよ」と思い出話を語ってくださる方が、現在でも多くいます。桑畑は地図記号まで存在するほど、農村の代表的な風景でした。そしてそんな桑畑の広がる風景自体、養蚕の発達により出現したものと言えるでしょう。

しかしながら、こうした風景は、思い出と写真の中に残るのみになってしまいました。宅地化の影響もありますが、繭の価格が下がり、養蚕が衰退してしまったことが大きな要因でしょう。現在では桑を知らない人の方が多いかもしれません。

現在の府中市内において、養蚕を行っている風景を見ることはありません。しかし、昭和初期まで養蚕は一般的に行われ、府中における重要な生業のひとつでした。しかもそれは、人々のくらしや環境を変えてしまう力すら持っていたのです。そして養蚕が行われていない現在においても、その名残を見ることができます。たとえば、畑や公園に一見無造作に生え、5月頃に実をつけている桑の木が市内各所にあります。これはかつてカイコのエサとして植えられた木の子孫かもしれないのです。（佐藤智敬）



郷土の森博物館敷地内の桑の木

最近の発掘調査

沖積低地で

古墳時代前期の遺跡を発見

日吉町一丁目 府中市ふるさと文化財課 湯瀬 禎彦



発掘された竪穴建物跡

日吉町の全域に建つ東京競馬場の構内では、1998年以降、諸施設の改築工事などに伴って発掘調査が行われています。その結果、弥生時代や奈良・平安時代、江戸時代など、多岐にわたる時代の遺跡が確認されました。昨年暮れから今春にかけて行われた発掘調査では、当地区で初めて古墳時代前期（今から1700年～1600年ほど前）の遺跡が発見されました。今回はこの遺跡を紹介します。

発見場所は東京競馬場構内の北東の一角で、立川段丘崖から約100m南の沖積低地に立地します。発見された古墳時代前期の遺跡は、竪穴建物跡1棟と河道跡1条です。この時期の遺跡が沖積低地で発見されたのは、府中市では初めてとなります。

発見された遺跡を具体的にみると、竪穴建物跡は一辺が約5mを測る方形の遺構で、これは住居として使用された施設と考えられます。河道跡は竪穴建物跡の約7m北で検出され、北西から南東へ流れた幅約4mの小河川の痕跡です。この河道跡からは多数の土器片が出土しました。これらの竪穴建物跡や河道跡は、沖積低地に形成された集落の一部と考えられます。

今回発見された遺跡は、古墳時代前期の生業のあり方を明らかにする上で重要な意味を持つものです。従来、市内における古墳時代前期の集落跡は、清水が丘を中心として、宮町や西府町などの立川段丘上に分布が限られていました。このため、これらの集落に暮らした人びとの生業は、台地上での畠作が主体と想定されました。しかし、今回、東京競馬場の構内で沖積低地に形成された集落の一部が発見されたことによって、古墳時代前期には沖積低地において水田稲作が行われていた可能性も浮かび上がってきたのです。

東京競馬場の構内は東西約1.3km、南北約850mに及び、これまでに発掘調査が行われたのはごく一部となります。今後、当地区のさらなる発掘調査の進展によって、府中の歴史を解明するための新たな発見があることを期待しましょう。



河道跡の遺物出土状況



ふたご座流星群の流星 筆者撮影

▼ はじめに

2013年2月にロシアのチェリャビンスク州に落下した隕石は建物を壊し、けが人を出すなど大きな被害をもたらしました。落下した際には空から光の点が現れ、筋を引き、大きな閃光となり、その数分後に衝撃波が地上を襲いました。NASAは、この隕石の元となった天体を直径18m、重さ10,000 tの小惑星だったと推定しています。この小惑星が地球大気に突入し、地上に落下して、直接大きな被害を与えたのです。

チェリャビンスク隕石落下の際に見られた光の筋は、流星の中でも明るい火球と呼ばれる現象です。ここでは、流星、火球、隕石についてそれぞれどのようなものか紹介します。

▼ 流星と火球と隕石

流星は、宇宙を漂っている塵（流星物質）が地球の大気に飛び込み、地上から100～200kmくらいの高度でプラズマ化したガスが発光したもので、70～90kmくらいで消滅します。前述したように、このうち特に明るいものを火球と呼びます。数cm以上の流星物質が飛び込んだもので、消滅点が高度40～50kmになることもあります。稀に消滅せず一部が残って地上に落下するものがあり、これが隕石となります。

▼ 流星と流星群

晴れた夜空を眺めていると、通常は1時間に数個程度の流星を見ることができます。このように無秩序に流れる流星を散在流星と言います。それに対して、毎年決まった時期に、見えた流星の経路をさかのぼると、天球上の一点に集まる、すなわちある点を中心として四方八方に飛ぶ流星があります。これらは流星群と称され、その中心（放射点）にある星座の名前をとって、ペルセウス座流星群やふたご座流星群などと呼ばれます。

流星群のもとになる流星物質は、彗星や小惑星です。彗星は夜空に尾を引いて現れる「ほうき星」ともいわれる天体で、その軌道上には撒き散らされた塵が広がり、地球がその中を通過するときに流星が見られます。

各流星群の元になる天体を「母天体」と言います。例えば、ペルセウス座流星群の「母天体」はスイフト・タートル彗星です。ちょうど8月13日頃、この彗星が残っていた塵の帯の中を地球が通過するので、ペルセウス座流星群の出現が最も多くなります。ちなみに彗星は、太陽系でも冥王星の軌道より遠いところが故郷で、氷と塵が集まってできたものだと考えられてい

ます。そのため、彗星の塵、すなわち流星群になるような流星物質の大きさは数mmから数cmで、大きいものが火球になることはありますが、隕石にはならないと言われています。

日本で見られる主な流星群

流星群名 (極大日)	特 徴
しぶんぎ座 (1月4日)	1時間あたり50個以上出現。極大のピークは短い。
こと座 (4月22日)	1時間あたり10個程度出現。まれに突発的な大出現が見られる。
みずがめ座 η (5月6日)	ハレー彗星を母天体とする流星群。南半球では1時間あたり100個程度。日本では1時間あたり10個程度出現。
オリオン座 (10月21日)	ハレー彗星が母天体。1時間あたり10個程度出現。
おうし座南 (11月3日)	活動期間は10月中旬から11月末まで。1時間あたり3個程度出現。
しし座 (11月18日)	母天体は周期33年のテンペル・タットル彗星。2001年に日本で1時間あたり数千個出現の大流星雨が見られた。
ふたご座 (12月14日)	母天体はファエトン。1時間あたり50個以上出現。3大流星群の1つ。

▼ 隕石とは

隕石が落ちるときは、昼間でも見えるくらい明るい大火球があらわれます。そして、ジェット機がスピードを出して飛んだときのような大音が響き渡り、空から石が落ちてきます。時には隕石が大気との衝突によりたくさんの破片となって、広い範囲にちらばって落ちてくる隕石雨になることもあります。

隕石はこれまで日本で50個、世界では約5万個が確認されています。そのうち約4万個は南極で発見されたものです。落ちてくるところが目撃されたものを落下隕石、目撃されずにその後発見されたものを発見隕石と呼んでいます。隕石の大きさはさまざまで、数gの軽いものから数十tの重さがあるものまであります。

▼ 隕石はどこからきたのか

落ちる前の軌道を正確に把握できている隕石がいくつかあります。それらの軌道をさかのぼると、全て火星と木星の間の小惑星帯からになります。一方、隕石と小惑星のスペクトルを調べると、ともによく似ています。このことから多くの隕石は、小惑星帯から来たと考えられていま

す。

そこで隕石は、小惑星や小惑星どうしが衝突してできた破片の一部が地球の軌道を横切って、たまたま地球に衝突したものだと考えられています。

▼ 隕石の種類

隕石はその名のとおり、9割以上は石でできていますが、その他に鉄でできている隕鉄や石と鉄などの金属が混ざり合った石鉄隕石があります。石の隕石にもかなりの鉄が含まれていて、普通の岩石の比重が2.5前後なのに比べて重く、3.5くらいあります。また、その表面は大気との摩擦熱で溶けた黒い熔融被膜でおおわれていて、地上の岩石には見られない大きな特徴となっています。

石質隕石を詳しく見ると、その多くは直径2mm以下の丸い粒状のコンドリュールと言われる物質を含んでいます。この物質を含んだ隕石を球粒隕石、含まないものを無球粒隕石と言います。球粒隕石には金属鉄が多く含まれていて強い磁石につきます。普通、酸素と鉄は結合しやすいのですが、球粒隕石ではケイ素と酸素の化合物と酸素と結合していない金属鉄が混在しています。

▼ 太陽系形成の謎を解く鍵となる隕石

これらの隕石がいつごろできたか調べてみると、多くは46億年前であることがわかります。つまり、これは太陽系の惑星が形成されたのと同じ頃です。このことから、隕石の多くは太陽系形成時の情報を持った始源的な物質と考えられています。

しかし、無球粒隕石には、46億年前より新しいものが少なくありません。その一部は月や火星、小惑星ベスタなどの組成と似ています。これは小惑星が衝突し、その破片が宇宙空間に放出され、その後地球に落ちて隕石になったためと考えられています。

この様に、隕石はさまざまな情報を持って宇宙からやってきます。太陽系形成の歴史はどうなっているのか、その謎を解く鍵のひとつは、隕石にあるのです。

企画展

隕石展 宇宙からの贈り物

7月11日(土)～9月27日(日)

会場：本館2階企画展示室

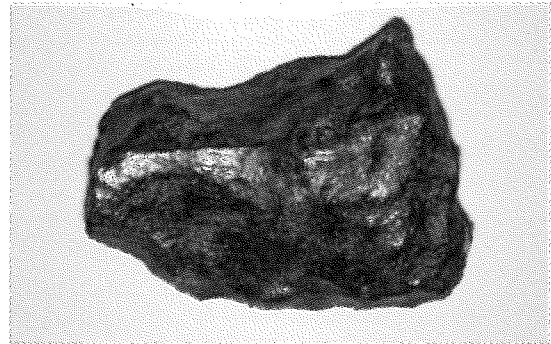
観覧：無料

みなさんは流星を見たことがありますか？流星の中でも、一等星よりうんと明るいものを火球といいます。その中でも特に明るいもので、見えた後しばらくすると振動（衝撃波）がやってきて地上に石が落ちてくることがあります。これが隕石です。このようなことが、江戸時代の多摩地域で起こりました。府中にも1817年12月29日の午後3時ころ、南西の方角が振動し八王子や日野に焼石が落ちた、という記録が残されています。そして、2013年2月15日にロシアのチェリャビンスクでも同じようなことが起こりました。この時は規模が大きく、衝撃で4000棟の建物が破損し、1500人近い人が負傷しました。

ロシアの隕石も多摩地域に落ちた隕石も岩石質の隕石で、石質隕石です。そして、発見されている隕石の多くは石質隕石ですが、他に主に鉄やニッケルでできた隕鉄、鉄やニッケルに岩石質が混じった石鉄隕石があります。

4・5ページでもお話ししましたが、こういった隕石の故郷は、ほとんどが火星と木星の間にある小惑星です。その小惑星には、今から46億年以上前に太陽系を作った材料がそのまま残っていると考えられています。そのため、多くの隕石が大切に保管され、さまざまな研究に利用されています。

それでは現在、最も多く隕石が見つまっているのはどこでしょうか。実は、オーロラ観測や珍しい生物の研究などで有名な南極大陸です。そして一度に複数の隕石を最初に発見したのは、日本の南極観測隊です。それを契機として精力



アメリカアリゾナ州に落ちたキャニオンディアブロ隕鉄

的に採集を始めた国立極地研究所は、世界でも有数の隕石コレクションを保有しています。その膨大な隕石コレクションのおかげで、新しい種類の隕石が発見されるなど、研究が進むようになりました。

そしてJAXA（宇宙航空研究開発機構）は隕石の元である小惑星を直接調べています。2010年には「はやぶさ」が、小惑星イトカワのかけらを地球に持ち帰りました。さらに昨年12月には、隕石の中でも特殊な有機物を含む炭素質隕石と組成の似た性質を持っている小惑星1999JU3を目指して「はやぶさ2」が打ち上げられました。この小惑星には、太陽系を作った星間ガスの中にあつた、地球の海や生命の材料となつたものと同じ水や有機物が残っていて、生命の起源の謎に迫ることができると期待されています。

今回の展示会では、さまざまな種類の隕石を紹介し、隕石と地球上の岩石を見比べてもらいたいと思います。また、日本に落ちた隕石はどれだけあるのか、なぜ南極大陸で隕石がたくさん見つかるのか、といった話題も取りあげます。

この展示を通して、隕石の面白さや、隕石がもたらす情報を知り、星や宇宙に興味を持っていただくきっかけとなれば幸いです。（本間隆幸）

協力：国立極地研究所、JAXA、国立科学博物館ほか

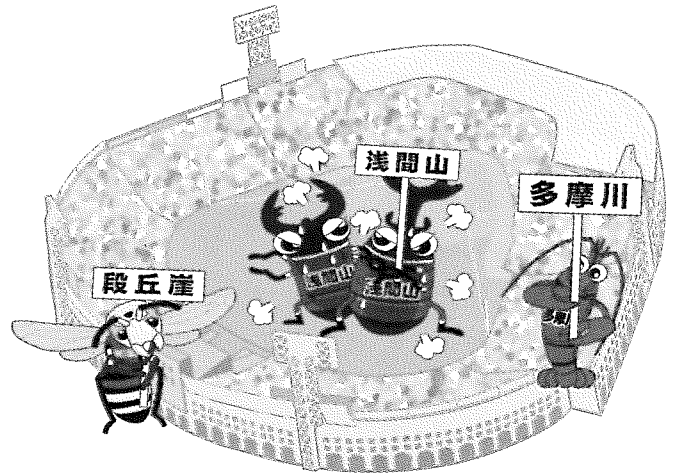
特別展 あしもとネイチャーワールド

夏の生きもの 甲子園

会場：本館1階特別展示室

観覧：無料

7/18（土）～8/30（日）



1915年に第1回全国中等学校優勝野球大会が開催されてから今大会で100年を迎える夏の高校野球大会。真夏の熱闘・甲子園は、すっかり日本の名物になりました。

夏と言えば他に何を思い浮かべますか？ 人によってイメージはさまざまだと思いますが、生きものではどうでしょう？ 最近あまり見かけなくなりましたが、夏の定番は昆虫採集。特にカブトムシやクワガタ、セミと言った種類が夏のターゲットだったのでは？ 実際に見られる夏の生きものは、昆虫以外にも多くの種類を数えます。今回は府中で観察することのできる夏の生きものを紹介するとともに、風物である甲子園になぞらえた構成で展示会を考えてみました。夏をイメージする生きものの一歩を決める、もうひとつの甲子園大会を繰り広げようということです。

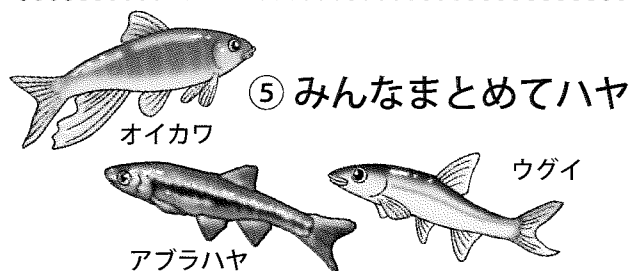
府中の自然を代表する特徴的環境は、大きく3つあります。市内を東西に横切る府中産線(段丘崖)、市街地のコンクリートの海原に浮かぶ島のような浅間山、そして市の南縁に沿って流れる多摩川です。これら特徴的な自然環境にはそれぞれで多様な生きものが活動しています。基盤となる豊富な植物に昆虫や野鳥が集まり、都市化が進行しているとは言え、それぞれで良質のオアシスを形成しているのです。

たとえば浅間山は、クヌギ・コナラ・イヌシデなどを主体とした雑木林の環境です。豊富な植物に集まるさまざまな昆虫たち、それらの昆虫や、植物の実を餌にしようと狙って来る各種の野鳥たち

がひしめき合っています。特に春から夏にかけては、チョウやセミ類、そしてもちろん、カブトムシやクワガタも含めて昆虫天国のようです。そこに年間を通じて浅間山で生活する野鳥、夏場に南から繁殖にやって来る渡り鳥(夏鳥)が加わり、まるで奥多摩の森林にも劣らない自然が広がるのです。都市にこんな環境があるなんて・・・本当に不思議だと思いませんか？

そんな府中の豊かな自然を楽しく伝える企画として「夏の甲子園」風トーナメントで「夏の生きもの」を認識してもらえたらと考えました。本展に登場する夏の生きものは、すべて府中で確認されているものです。中には数が減ってしまったものや、大変珍しい種類もあります。でも大半はみなさんがよく知っている生きものです。あとは博物館が判定する勝敗で、夏の生きものチャンピオンを暫定的に決めようと思います。たとえばカブトムシvsクワガタ・・・勝敗を決めるのが難しい対戦ですよ。異論があるといけませんから、見に来てくれた人にも自分なりの視点で博物館とは違うチャンピオンを選んで欲しいのです。結局は好き嫌いが左右するのも知れませんが、これはあくまで夏休みのアトラクション。遊びながら府中で観察できる生きものを、しっかりと頭にインプットして、実際に現地で探してもらいたいのです。

もしかしたら、新たな夏の強敵が出現するかも知れません。生息する生きものの変化を感じながら、府中の自然を未来予想する機会になれば、この甲子園大会は大成功となるはずです。(中村武史)



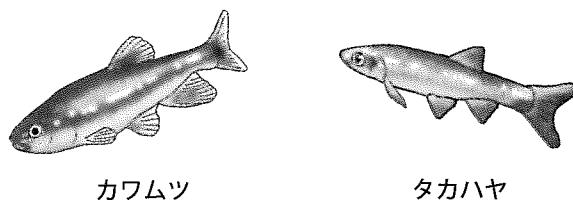
本連載も2年目に入りますが、初回で紹介したオイカワを覚えていますか？ 多摩川で普通に見られる魚の筆頭として、その形態や習性を解説しましたが、その中でハヤと言う別名で呼ばれることにも触れました。ハヤという呼び名は、国内で生息するコイ科淡水魚の内、小型で細長い形をした魚種の総称として使われています。ゆえにハヤと呼ばれる似たような魚が複数存在することになりますが、今回は多摩川に生息するハヤに注目してみましょう。

オイカワと並び、多摩川を代表するハヤはウグイです。全長30cmほどになり、銀白色の体で軽やかに泳ぎます。3～5月の産卵期になると、この銀白色の腹部は朱色になり、体側には金色に近い帯が現れます。これは婚姻色と言って、特に水中でも目立つ色を発し、繁殖の合図となります。この時期は、ウグイの群れが浅瀬に移動して産卵する様子が観察できると思います。もう一方のハヤ、オイカワの婚姻色も大変特徴的で、光沢のある赤や青緑がきれいに混じることは、すでに紹介しています。多摩川の2大ハヤは、この時期の婚姻色に注目です。ウグイは、一生を淡水で終える淡水型と、生まれた後で海に下る降海型があり、一部のウグイが汽水域や沿岸部にも生息しています。オイカワは淡水で一生を過ごし、東北や四国太平洋側などにも移入され、分布を広げています。広範囲にわたってハヤの総称で呼ばれていることを考えれば、この仲間は全国に散っていると言っていでしょう。但し、分布域が広い反面、地域によっては生息場所が限定されていたり、生息地・個体数ともに減っている所も少なくありません。

さて、もう1種類のハヤを紹介します。呼び名と言うよりは正式和名にハヤの名が付いているアブラハヤです。鱗が小さく、触れると体の表

面がヌルヌルしていることから、油の名が付けられています。大きな特徴は、体側に黒い縦帯があり、これより背面は小さな黒斑が多数散在します。稚魚の時代にはこの黒い縦帯は現れません。多摩川では、メダカやオイカワの稚魚などとサイズも色も似たアブラハヤの稚魚が同時期に混在するので、成長前ではどれがどれだか見分けが難しいことがあります。アブラハヤは、川の上流から中流で流れの緩やかな水温の低い水域に多くが生息します。岡山県・福井県以北の本州のみに分布し、谷戸の支流や湧水の入る河川で普通に見られる種類です。博物館近くの多摩川・大丸堰では、伏流水の湧くワンドに多くいます。本流に泳ぐハヤがオイカワ・ウグイなら、アブラハヤは外れた場所で活動しているようです。雑食性で、底生生物や底石に付着する藻類、または上流から流れて来る落下昆虫などを餌にしています。

ウグイやアブラハヤは多摩川在来のハヤですが、オイカワは琵琶湖産のアユを移入した際に混じって来たものと考えられています。但しウグイでも、下流・河口域には放流個体が含まれます。この他にも尻びれの大きさをオイカワに大変よく似るカワムツや、アブラハヤとは見分けの難しいタカハヤも移入され、繁殖しています。多摩川に近い鶴見川水系では2000年代に入って、アブラハヤとタカハヤの交雑を示す遺伝子を持ったタイプも出現しています。移入による魚の分布拡散が、さまざまな川の生態を崩すことにも繋がってしまうのです。ゆえにどれでもハヤなのでしょうが、それぞれの種を見極めるには少々混雑が過ぎているのかも知れません。オイカワ・ウグイ・アブラハヤの多摩川ハヤ3態は、今夏の特別展「夏の生きもの甲子園」でも紹介する予定です。じっくりと観察してみてください。



平成 26 年度
寄贈・寄託資料一覧

平成 26 年度
利用状況

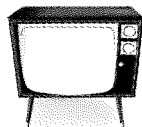
No.	寄贈・寄託者 (敬称略)	資料名	分類	数量	受入
1	田中 忍	八幡宿田中忍家文書	歴史	25点	寄贈
2	匿名	安養寺境内絵葉書	歴史	1点	寄贈
3	湯本 繁則	ベースボールゲーム 他	民俗	6点	寄贈
4	宮崎 友吉	あられ煎り 他	民俗	7点	寄贈
5	屋敷分上組念仏講	念仏講道具	民俗	1点	寄贈
6	田中 忍	写真帳	民俗	1点	寄贈
7	住崎 輝男	ミシン	民俗	1点	寄贈
8	小平 悦子	ひな人形・五月人形	民俗	2点	寄贈
9	酒井 宏雄	テレビ 他	民俗	20点	寄贈
10	市村 隆治	祠・神職道具	民俗	一式	寄贈

区分	有料		減免 (障害者・ 4歳未満等)	合計	
	一般	団体			
博物館観覧者 開館日数304日	大人	129,910	4,219	49,245	183,374
	子供	21,464	13,760	47,508	82,732
	小計	151,374	17,979	96,753	266,106
上記のうち アネリカ観覧者 投影日数206日	大人	20,526	1,600	3,747	25,873
	子供	10,493	6,273	4,410	21,176
	小計	31,019	7,873	8,157	47,049

資料をご寄贈ください！

博物館では、次の資料を集めています。
所蔵されている方で、博物館に寄贈しても良い
という方がいらっしゃいましたら、ご一報くだ
さい。

- *京王線をはじめとする市内鉄道に関わる資料
- *昭和40年代以前の家電製品
- *養蚕信仰にかかわる資料



★「あるむぜお」は定期購読できます！★

「あるむぜお」の送付ご希望の方は1年単位で承り
ます。4回分の送料328円(切手でも可)を添えて、
受付カウンターでお申込みください。

新刊案内

📖 『府中市郷土の森博物館紀要』 28号 400円
学芸員他による研究報告・論文集です。

- ・常設展示リニューアルの展示コンセプト [深澤靖幸]
- ・縄文集落模型制作に関する覚書
- 武蔵台遺跡の早期集落の復元 - [深澤靖幸]
- ・「防人、国府からの旅立ち」と「中世合戦物語-ある僧の回想」
- 常設展示室リニューアルにともなう映像ナレー
ションの記録 - [小野一之]
- ・府中の自然と生物「現在・過去・未来」
- リニューアル常設展「都市と緑と」のジオラマ
に込めた意図 - [中村武史]
- ・考古学資料の3次元計測、応用と可能性 (1)
- 府中市武蔵台遺跡出土後期旧石器時代石斧 (その1) -
[野口淳・横山真・千葉史]
- ・サイノカミ再現展示の記録
- 常設展示室リニューアルにおける市民協働の成果 -
[佐藤智敬]
- ・徧無為 依田貞鎮が朝廷に進上した著作について
[野田政和]

📖 博物館研究資料集第1集 1,100円

『県居井蛙録-江戸時代の庶民の記録』

府中市住吉町の旧家・内藤治右衛門家に残っていた
1802年から35年間にわたる日々の記録を翻刻した資
料集です。

※新刊は、本館1階ミュージアムショップにて
発売中です。

連載 『県居并蛙録』にみる江戸時代の庶民の生活

『県居并蛙録』は、住吉町の旧家・内藤治右衛門家に残されていた、享和2年（1802）から天保7年（1836）にいたる日々の記録です。4代当主重喬と5代当主重英によって著されたこの史料には、当時の庶民の生活に関わるさまざまな出来事が記されています。本コーナーでは、毎回テーマを決めてその内容を紹介します。

重英の惣領、鼎介の婚礼がとりおこなわれたのは、文政9年（1826）4月13日のことでした。花婿はこの時数えで21歳、花嫁は2歳下の19歳で名前を律と言いました。律は府中宿のうち番場宿（現 宮西町）の名主・矢島次郎左衛門の次女で、いわば豊かな家同士の婚姻です。

この際仲人となったのは、内藤治左衛門と松本甚五郎でした。治左衛門は治右衛門家の本家の当主、甚五郎は定かではありませんが、本宿村（現 西府町）の組頭だった人物ではないかと思えます。当時の仲人は、花婿・花嫁の双方の「家」を仲介する者で、現在のように1組の夫婦がつとめるものではありませんでした。

婚礼に至る経緯を追ってみると、まず2月23日に重英が治左衛門に縁談を依頼し、3月13日に治左衛門宅で甚五郎立会いのもと、律を娶る話がまとまりました。6日後の19日には、内藤家からの結納が矢島家に届けられています。

結納に関わる費用

項目	金額
松魚節12本	金2朱と銭32文
するめ	銭200文
芋	銭148文
紅粉・白粉	銭148文
熨斗	銭64文
昆布	銭108文
中貫（抜）草履2足	銭124文
白足袋2足	銭264文
酒5升	銭600文
結納帯代	金3両

①跡取り息子の結婚

この結納について、少し補足史料を見てみましょう。治右衛門家に残されていた「鼎介新婚祝儀諸入用帳」です。結婚全般の費用を記したこの帳面から、結納に関する部分を左下の表に抜き出してみました。「松魚節」や「するめ」「昆布」「熨斗」など現在でもよくみる結納品が並んでいます。「芋」は「友白髪」の材料、紅粉・白粉は化粧用でしょうか。その他中抜草履や足袋、酒などあわせて金2朱と銭1貫688文、これに加え結納金にあたる帯代が3両かかっていることがわかります。

さて婚礼の3日前、重英は江戸へ2泊3日で買物に出かけました。日本橋の富岡八兵衛方や魚河岸でさまざまな魚を購入し、新宿（現 宮町）まで馬2匹に付けて運んでいます。これらの食材は府中宿の万年屋宗助によって料理され、祝宴に供されました。夜明けまで続いた婚礼には、仲人と同行してきた供が20人、親類や村人が80人参加し、全部で100人前の酒食が振る舞われています。前述の「鼎介新婚祝儀諸入用帳」によると、この結婚にかかった花婿側の費用の総額は、金17両3分と銭676文にも及びました。

縁談の依頼から婚礼までの2か月弱、段取りや準備に奔走したのは重英でした。婚礼は「家」と「家」が結び付く場であるとともに、地域の人々に新しい家族をお披露目する大事な儀式です。このため、江戸時代の庶民の婚礼にはいろいろ規制もありましたが、鼎介の結婚のお披露目は、父・重英の仕切りのもと、それ相応の費用をかけ、多くの人を招いて行われたのでした。



（花木知子） 婚礼の日の記録